「早川水系河川整備計画（素案）」に関する
県民意見及びこれに対する県の考え方

募集期間
令和５年11月７日（火）～令和５年12月６日（水）

（１）意見提出件数　６件（提出者数２人）

（２）意見内容の分類

	意見内容	件数
1	治水に関する意見	4
2	利水・環境に関する意見	1
3	維持管理に関する意見	1
4	その他	0
合計		6

（３）反映状況の分類

	反映状況	件数
A	反映した（している）意見又は賛意	0
B	反映できない意見	0
C	今後の参考とする意見	6
D	その他（感想、質問等）	0
合計		6

神奈川県 県土整備局 河川下水道部 河港課

「早川水系河川整備計画（素案）」に関する県民意見及びこれに対する県の考え方

意見内容の分類	区分
治水に関する意見	1
利水・環境に関する意見	2
維持管理に関する意見	3
その他	4

反映状況の分類	番号
反映した（している）意見、または賛意	A
反映できない意見	B
今後の参考とする意見	C
その他（感想、質問等）	D

No.	内容区分	意見要旨	反映区分	県の考え方
1	1	早川水系河川整備計画について 私は、早川水系河川整備計画を立てるにあたっては芦ノ湖の湖尻水門からの度重なる放流による護岸浸食の影響も考慮する必要があると考えている。その主張に至るエビデンスの一例は、企業庁仙石原品の木取水堰から入仙橋間における護岸整備である。現場近くに住む地主は、平成時代になってから早川の護岸浸食が急速に進行したと証言している。調査の結果、昭和62年以前の湖尻水門放流回数は年平均1回以下であったのに対して平成時代になると、その数は10倍以上に増加していることが判明した。放流による濁流が頻繁に繰り返されるようになれば、水圧を受ける護岸の浸食がそれまで以上に進むことは当然の結果である。その他の早川流域でも規模の差はあっても同様な状況が持続的に発生していると推察される。それでは何が原因で湖尻水門からの放流回数がこれほどまでに増加したのだろうか？県から入手した昭和44年以降の芦ノ湖水位年表を解析してみると、芦ノ湖の平均水位は昭和時代と比べて平成時代のほうが20cmほど高いことが判明した。しかも、昭和時代の低かった水位記録を基にして昭和62年に作成された湖尻水門操作規則では、湖水を少しでも多く貯留する目的で常時満水位と呼ばれる芦ノ湖の目標水位を2.3mと定めたのである。しかしその後に誤算が生じた。つまり、芦ノ湖の水位が上昇したにもかかわらず目標水位は依然として2.3mのままであったために、芦ノ湖は常に高水位を保ち続けなければならず、結果的に平素の水位は昭和時代よりも氾濫危険水位に近づいてしまったのである。こうして芦ノ湖はひとたび大雨が降れば昭和時代よりも氾濫しやすい湖へと変化し、その浸水対策として湖尻水門から頻繁に放流せざるを得なくなったのである。このことが原因で放流される側の早川流域においては、平成時代から護岸の浸食が急速に進行するようになったのである。早川水系河川整備計画に携わる者は、このメカニズムとその危険性を真摯に受け止めなければならない。	C	○護岸工事に当たっては、放流による流速などを踏まえながら、具体的な構造等について、事業実施段階で検討していきます。
2	1	また以上の考察から言えることは、芦ノ湖と早川の治水対策の相関関係を分断した状況下で早川水系河川整備をいくら計画しても、根本的な解決には至らず、護岸整備の繰り返しに終始するだけなのである。近年になってからの芦ノ湖の水位上昇こそが、芦ノ湖と早川流域における水害発生の主たる要因であることからして、その対策の要となるのは芦ノ湖の水位を湖尻水門操作規則が定められた当時の水位まで低下させることに帰結する。その決め手となる具体的な方策としては、湖尻水門1号ゲートの期間限定放流による洪水期制限水位の導入こそ最も有効な手段であると考えられる。即ち1号ゲートの敷高は昭和時代の平均水位と概ね等しいので、洪水災害が予想される期間に限り湖尻水門1号ゲートをわずかに開放して早川へ湖水を日常的に自然越流させ、芦ノ湖の水位を今よりも下げて昭和時代の安全だった水位に近づけるのである。そうすれば、芦ノ湖も含めた早川水系における防災対策は、より万全となり、河川の環境保全効果も合わせて期待できるのである。しかも、この方策は湖尻水門のゲート操作だけで足りるので特別な予算を必要とせず、流域治水の考え方からも、残すは河川管理者としての英断を待つばかりなのである。なおかつ、地球規模の気候変動が顕著化した現在の地球温暖化を考え合わせれば、その決断は一刻の猶予もないのが実情である。 以上述べたこの芦ノ湖の水位低下の要望は、令和元年東日本台風災害後における箱根町全町民の総意として県へすでに提出していることを河川管理者は今いちど思い出して欲しい。	C	○芦の湖と早川の浸水対策については、静岡県芦湖水利組合の窓口である静岡県裾野市や箱根町などと設置した芦の湖浸水被害対策連絡会議の場を活用して、今後も引き続き話し合いを行い、安全・安心の確保に努めてまいります。

No.	内容区分	意見要旨	反映区分	県の考え方
3	1	早川水系河川整備計画（素案）についての意見書 まず箱根カントリー倶楽部の早川との歴史と当倶楽部の説明をさせて頂く。 昭和29年の開場以来、旧早川の流れの時、7月8月の台風時は毎年のように水害に苦しんでいた。特に昭和44年は一晩で270ミリ降り、旧水門が5門全開され、甚大な被害を受け、冠水面積20750平米。その後当時の社長や総支配人などが各方面に水門運用と河川改修等の嘆願を行ったと30周年誌に記載されている。それを受け昭和44年下期より河川改修が行われ4年かけて現在の流れになり被害が減った。 しかし整備計画のP14表2.1には記載されてないが平成17年8月25～26日かけて563ミリ（当社計測）、第一門全開、第二門30センチ、第三門30センチにより水門から当コースまでの上流部の護岸が崩れ、土砂が大量にコース内に流れ込んだ。芝地被害面積14,500平米、堆積土砂10,500立法メートル、営業損失を含め被害額は約90百万円となった。 そして同表のNo.5の平成19年9月６日ではさらに大きな被害を被った。芝地被害面積20,000平米、堆積土砂15,000立法メートル。河川内土砂を県は場外搬出をするほどであった。被害額も営業損失も含めると約100百万円となった。その後、水門の運用方法が変更され令和元年の台風19号の際も含めて当倶楽部では早川による大きな被害はなかった。 次に当倶楽部の概要を説明させて頂きたい。1954年に9Hでオープンし翌年に18Hでの運営が開始され、来年で70周年となる。ゴルフ場の評価としては高く評価されており各メディア等で神奈川県第1位となっており、Top 100 Golf courses.com 日本国内21位などの評価で箱根町にとって重要な観光施設となっている。ゴルフ場利用税の仕組みは本意ではないが、差引納付額平均年20百万円を納付している。開場以来2,242,000名の来場者受け入れており年間来場者平均約33,000名、この10年でも265,000名の会員を主とするプレイヤーを受け入れている。会員も財界の方も多く、エクゼクティブな方の憩いの場となっている。 日本を代表する設計家の赤星四郎氏がこの地を気に入り自然を生かした18Hを描き、生涯最高の出来のコースだと自負した。オリジナルの設計を大事に管理し未来へ残して生きたい。 また自然との共生や環境保全は1995年くらいから重要なテーマの一つと位置付け取り組んできた。昨年景観と生物多様性の配慮「いきもの共生事業所（ABINC認証制度）」のトライアル認証取得第一号となった。これは環境省が主導する30 by 30と協調するものである。 計画を見て最近の気候変動に対応するため全流域でインフラ整備の必要性は感じる。しかしながらまず水門管理のソフト面での対応できることがもっとありその運用を行った後のハード面を考えた方が良いように思われる。特に芦ノ湖の水位を現在の2.3メートルから1.9メートルにすることなどはコストも掛からず実行できるものと考える。メリットは確実に多く、降水時のキャパシティ増は当然のこととして自然の川の流れも復活し、生物多様性の観点からも湖、流域共に効果が高いとえられる。1.9メートルにした際の弊害の調査をまず徹底して行ってもらいたい。	C	○芦の湖と早川の浸水対策については、静岡県芦湖水利組合の窓口である静岡県裾野市や箱根町などと設置した芦の湖浸水被害対策連絡会議の場を活用して、今後も引き続き話し合いを行い、安全・安心の確保に努めてまいります。
4	2	当倶楽部の中の早川の拡幅、掘削、護岸堤防の整備に関して先に申したようにコースの変更は極力避けていきたいところである。しかしソフト面の改善をする事によりその規模が極力小さくなるような方向で考えてはいきたい。工法としてはグリーンインフラを取り入れ、景観や生き物多様性を鑑みることはもとより、ゴルフコースとしては戦略性やコースの面白さなども考慮する必要がある。	C	○拡幅や護岸整備などの河川工事における詳細な位置等については、周辺の地形や土地利用などを考慮しながら、検討していきます。また、河川工事に当たっては、「多自然川づくり」を基本とし、河川工事の実施にあたっては、グリーンインフラ の考え方を取り入れながら、河川に生息する多様な生物の生息・生育・繁殖環境や、景観に配慮した整備を行っていまいります。
5	1	今回の早川水系河川整備計画（素案）のP25河川工事の目的、種類及び施行の場所並びに当該河川工事の施行により設置される河川管理施設の機能の概要の項で早川上流　入仙橋付近～雉子橋付近　河道拡幅、河道掘削、護岸整備、堤防整備が工法として提示されている。雉子橋付近はその上流の堰堤までの解釈で良いのかを確認したい。	C	○河川整備計画（素案）では、流下断面が不足している箇所を整備箇所として記載しており、雉子橋上流の堰堤付近については、現在、整備箇所に含まれておりません。 ○なお、具体的な工事範囲は、周辺の地形や土地利用などを考慮しながら検討してまいります。
6	3	また護岸整備については当コースのNo.12ホール右側は水門開放が増えた為、護岸が急激に崩れてきている。その上はコースの重要性の高い外周路が有り、道路のヘリに亀裂が入りオーバーハングしており大型車は通行を規制する事態となりこのまま進むと道路崩壊となりかねず、インフラと人命の危機となりつつあり早急な対応を望む。	C	○護岸の破損などについては、現地の状況を確認したうえで、適切に対応してまいります。